堺市立殿馬場中学校　第７３期生　第３学年進路指導通信

高飛信・伸・ｕｐｉｎｇ

夢と勇気と優しさと　2021・10・25（月）Vol.108

ノーベル賞にまつわる話題の続編を・・・２０１４年の新聞記事から

『ノーベル平和賞 17 歳の勇気』

「世界のすべての子どもにペンと本を」ノーベル平和賞に決まったパキスタンの少女マララ・ユスフザイさんの訴えだ。貧しい国の子どもたちが皆、学校に通い勉学に励むよう支援したい。

マララさんは１７歳。ノーベル賞全部門の受賞者の中で史上最年少だ。児童教育の向上を目指す活動が評価された。インドの児童権利擁護活動家カイラシュ・サトヤルティさんとともに選ばれた。

マララさんは１１歳のときからウェブサイトで、イスラム過激派に脅されて学校に行けない女子生徒の様子を伝えた。２０１２年１０月、過激派に頭を撃たれて重体になり、英国に搬送され大手術を受けて奇跡的に回復した。

世界中から届いた義援金と自伝の印税を元に「マララ基金」をつくり、貧しい国々の子どもの就学を支援している。昨年七月、国連で演説し、「私たちの口をふさごうとしたテロリストの試みはついえた」「ペンと本を手に取ろう。教育こそが唯一の解決策だ」と訴えた。世界中の人々がどれほど励まされたことか。

国連の推計では、全世界で小学校に通えない子どもは約１億人、児童労働者は１億６千８百万人いる。読み書きや計算ができないままでは、希望する仕事に就けない。育児でも苦労する。次世代にも深刻な影響がでるのだ。

不幸なことに、教育の権利を奪う極端な思想がむしろ広がりをみせている。イラク、シリア両国の一部を占拠したイスラム教スンニ派過激派組織「イスラム国」は女性の教育どころか、外出にまで目を光らせる。ナイジェリア北部のイスラム過激派ボコ・ハラムは４月、中学校を襲撃し、女子生徒２００人以上を拉致した。

マララさんに対する殺害予告は今も続く。滞在先での身辺警備には万全を期してほしい。世界に勇気と非暴力の大切さを教えてくれた１７歳の少女を、今度は私たちが支えなければならない。

同時受賞したサトヤルティさんは、インドの労働搾取から児童たちを救い、更生させる国際活動を３０年以上続け、ガンジーの精神を今に伝えたことが評価された。

二人の受賞者は、ヒンズー教徒のインド人とイスラム教徒のパキスタン人。ノーベル賞委員会は、二人がそれぞれ、過激思想に立ち向かい教育の権利拡大という共通の目的に取り組んでいると強調した。印パ両国の指導者にも和解を促したメッセージといえる。

【カブールＡＦＰ時事】から

◆最近連日ニュース等で報道されている「イスラム主義組織タリバン」。ノーベル平和賞受賞者の女性人権活動家マララ・ユスフザイさん（２４）が１７日、複数の活動家と連名で、アフガニスタンを実権掌握したイスラム主義組織タリバンに向けて公開書簡を出した。

◆書簡でマララさんは、同国で中等教育学校の通学に女子生徒が排除されたことについて「少女への教育を事実上禁止する政策を破棄し、すぐにでも学校を開放するように」と訴えた。

◆また、書簡でマララさんは「宗教は少女らの通学の妨げを正当化しない」と主張。アフガンは少女への教育を禁止する世界で唯一の国だと強調した。また、２０カ国・地域（Ｇ２０）の首脳に対し、アフガンの子供の教育に対する緊急支援を要請。１８日時点で、書簡に賛同する６４万人以上の署名が集まった。

◆マララさんは 2014 年にノーベル平和賞を受賞、その２年前の 2012 年、スクールバスに乗り込んできた武装勢力「パキスタン・タリバン運動」のメンバーに銃撃されている。

◆僕は、イスラム教のことも知らないし、そのような地域へも行ったことはない。全世界で小学校に通えない子どもは約１億人、児童労働者は１億６千８百万人いるという事は、知識として知っているだけだ。ノーベル平和賞のことも、今日の通信の内容も新聞の受け売りにすぎないけどね。

◆でも、マララ・ユスフザイさんが 2014 年 10 月 10 日、英バーミンガムで行ったスピーチを明日から２回にわたって掲載しようと思う。

◆「進路選択」を迫られている、この時期だからこそ、当時１７歳のスピーチに耳を傾け、素直に、とにかく読んで欲しい。学び（学習）とは何なのか？

君たちにはまだ選挙権はないが、この週末、衆議院議員選挙が行われる！！

詞集「たいまつ」より

『「君、理想と現実は違うよ」「君、抽象論を持ち出すなよ」「君、現実を直視しなければ社会は改革できないよ」と若者をたしなめる大人を、数えきれないほど見た。

しかし、そのような大人達が現実を直視して社会を改革したことや、抽象を越えた理想を提示したことは一度も見たことがない。

つまるところ、現実を直視しないものは理想を抱くことができず、理想を抱いていないものは現実を直視することができず、彼らにできることは分別くさいカラをかぶって虫けらになることだけだ。』

むの　たけじ